



「イスラエル／エジプト／エチオピア／ナイジェリア／ガーナ。これは、私たちがガン族がたどった道のりです。故郷のイスラエルをある事情で後にし、長い年月をかけてガーナに着きました。そのとき食料は底を尽き、飢えに直面していました」

ガン族の祭り「フォモオ」の由来をカルチャー・センターの職員アイザックさんに尋ねると、ガン族の大移動に関する伝説を語り始めた。彼らはガーナの沿岸部に住む主要部族である。

「私たちは一心に神に祈りました。すると神は穀物と魚を与えてくださいました。それ以来、神の恵みに感謝し『フォモオ』の祭りを行っているのです」

首都アクラで開かれるこの祭りは、8月初旬、各地区で盛り上がりを見せる。女性たちが特別料理「ケペケペレ」（トウモロコシの粉に魚スープをかけたもの）を作ることから始まり、翌日には、料理の入った大皿を持つ家臣やお小姓、楽団を従えた首長が、先祖の墓や縁の土地・建物回る。その途中で出会った人々には料理が振る舞われる。

一見にぎやかな「フォモオ」の祭りだが、そこには先祖たちが経験した「飢えの記憶」が深く刻まれているように思えた。

春 夏
秋 冬

23

8月 フォモオ

祭りに刻まれた 飢えの記憶



文・写真＝飯塚 明夫

写真家。青年海外協力隊として活動後、西アフリカと北アフリカのサハラ縦断交易路の取材を中心に、アフリカ各地の人々と自然、文化と歴史を撮り続ける。写真集に『West Africa』。